

満願寺遺跡出土の土器・陶磁器

—鎌倉出土品との比較から—

はじめに

満願寺遺跡の調査では、大量の瓦に混じって土器や陶磁器の破片もわずかながら出土しています。満願寺と同じ時代、北西 20km の鎌倉は東国武家政権の都として急速な成長を遂げ、多くの人・モノ・情報が行き来しました。当時の満願寺に葺かれた瓦には鎌倉・^{ようふくじ}永福寺との関係性がうかがえ、土器・陶磁器の様相も鎌倉と近似しています。

ただ、満願寺遺跡出土品における瓦と土器・陶磁器との間には、製作された年代に開きがあるようです。瓦は 12 世紀末～13 世紀前半の製作年代＝堂宇の創建・改修年代が考えられているのに対し、土器・陶磁器は 14 世紀代に主体があり、近世以降の製品も存在します。

このことは、取りも直さず瓦葺き建物が一定期間の存続時期を経たのち、土器・陶磁器類が持ち込まれたことを示唆しています。

土器Ⅲ=「かわらけ」は消費地の近郊で生産されたローカルな製品で、東海地方など遠方からもたらされた陶磁器に比べると、製作から使用・廃棄に至る時間が短かったことが推察できます。本報告では、こうした出土品間の「時間差」も踏まえた上で、土器・陶磁器について、満願寺と鎌倉の出土品を見比べてみたいと思います。

満願寺遺跡出土の土器・陶磁器

【図 1】は、満願寺遺跡で出土した土器・陶磁器他の遺物実測図です。1～24・42 が「かわらけ」で、42 のみが「手づくね」という京都発信の技術で作られ、他は「ロクロ」=回転台上で成形され、外底には糸で切り離した際の痕跡が残ります。「ロクロ」の器形は体部の湾曲が強いものが主体で、直線的な外開きタイプのものがあります。いずれも小破片から全体形状を復元した図であるため、口径など大きさには誤差があることをご承知ください。

25～34 は陶磁器類で、これも小片ばかりで全体形状の分かる資料はありませんでした。

鎌倉の「かわらけ」様相

【図 2】には、鎌倉の「かわらけ」変遷を掲載しました。源氏三代将軍の御所=「大倉幕府」推定地の北東近く

押木 弘己（鎌倉市教育委員会）

で出土した資料で、幕府滅亡後にも土地利用が大きく衰退することなく続いていることから、12 世紀末～15 世紀前半の遺物変遷を、層位上の裏付けをもって把握できる鎌倉でも希少な例となっています。年代観は報告書の見解のまま示したので検討の余地はあります、図面の下から上方に向かた「かわらけ」形状の変化が明瞭に見て取れます。

この変遷図に照らすと、満願寺遺跡の「かわらけ」は以下のように位置付けることができます。

42 の「手づくねかわらけ」は小片のため全体形状は知り得ませんが、鎌倉の「手づくね」存続期間である I～III 期に相当します。実年代の特定は難しいものの、前述した満願寺創建・改修年代に近い、13 世紀代に位置付けが可能な数少ない資料です。

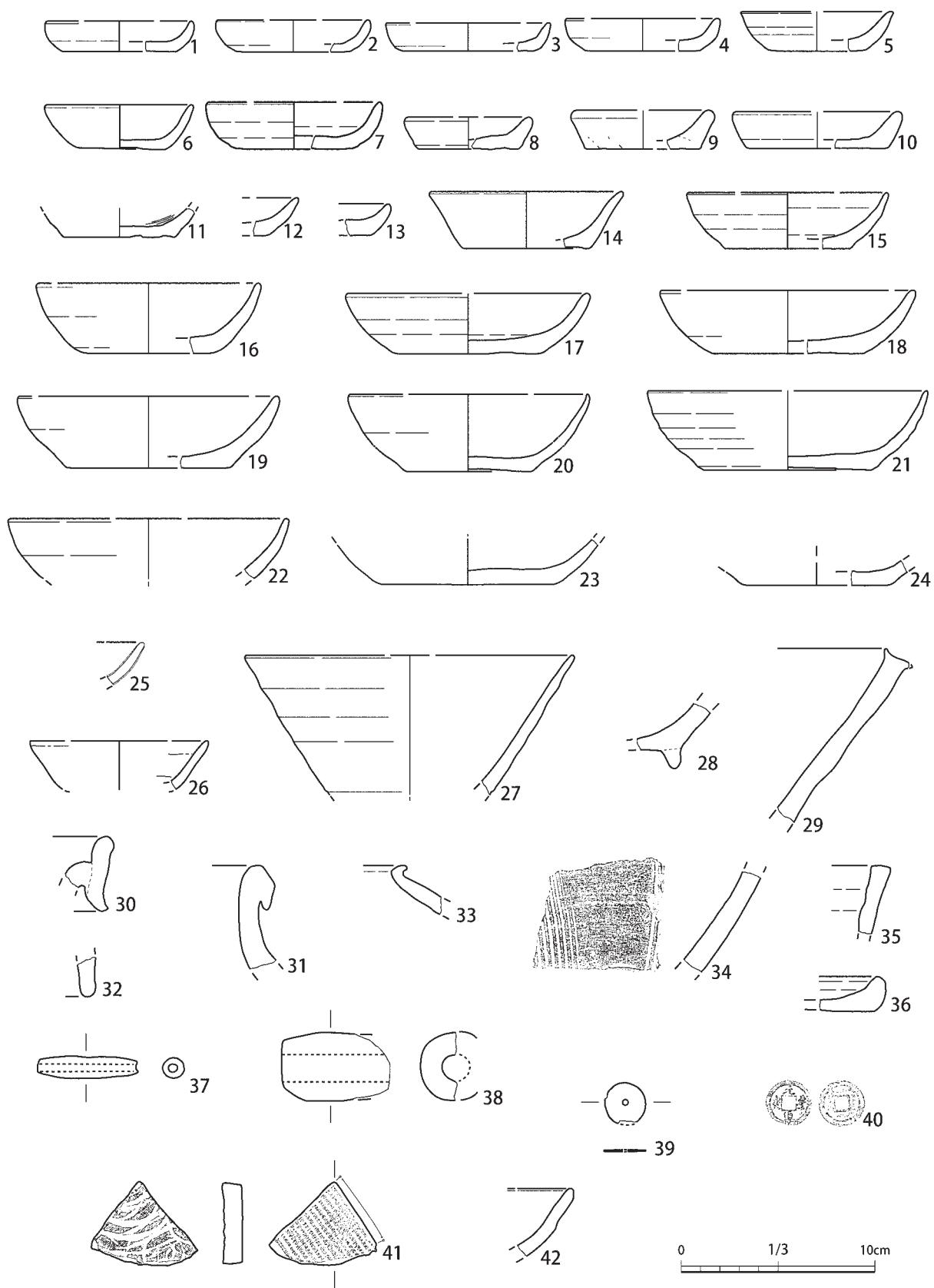
1～24 の「ロクロかわらけ」のうち、体部の湾曲が強いタイプは鎌倉の III～IV 期に、8～10・14 など外開き器形のものは IV 期以降に相当するでしょうか。

満願寺遺跡出土の「かわらけ」は鎌倉のものと近似した胎土（粘土）で作られており、器形の上でも両者に明確な違いを見て取ることはできません。肉眼観察に頼る限り、両地域の「かわらけ」は供給元が共通していた可能性を考えても良いかもしれません。以上の比較検討に基づき、満願寺遺跡の「かわらけ」は 14 世紀以降の製品が主体となっていることが指摘できます。

陶磁器の様相

【図 2】には、図示はしなかったものの「かわらけ」にともなう陶磁器類の様相についても説明を載せています。満願寺遺跡の出土陶磁器は小片ばかりのため、使用時からそれなりの時間が経過したものが多いでしょう。そのなかでも 14 世紀以降の製作年代を推定できるものが多く、「かわらけ」の年代観と合致する内容となっています。

細片ゆえに全体の形を想像することは難しいですが、33 の渥美窯産短頸壺は、筆者自身も鎌倉で目にした経験がなく、注目したい資料です。比較対象として的確ではないかもしれません、神奈川県下では綾瀬市宮久保遺跡で「藤原」と焼成前のヘラ書きが施された渥美産短頸壺が出土しており、有名な資料です。【図 3】には、当例（左）と渥美・大アラコ 3 号窯出



【図1】 満願寺遺跡出土の土器・陶磁器類

IV期（第1面上）14c末～15c代



- ・口クロかわらけの・外反・厚手化が進行
- ・瓦質土器の火鉢・風炉が目立つよう

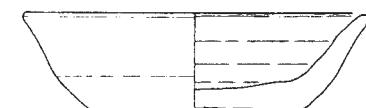


- ・常滑甕は8型式まで

IV期（第1面下～第2面）14c末～15c代



- ・かわらけは口クロ製品のみ、外反・厚手化する段階
- ・瀬戸窯製品の碗皿が存在感を増す→貿易陶磁器は減少傾向に

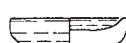


III～IV期（第2面下～第3面）14c前～末葉

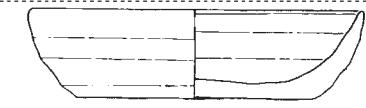


- ・手づくねかわらけが消失、かわらけは口クロ製品のみに
- ・龍泉窯系青磁の蓮弁文碗+坏Ⅲ類（細蓮弁文碗をともなう時期）
- ・常滑甕は6a型式まで

II～III期（第3面下～第4面）13c後葉



手づくね



手づくね

- ・龍泉窯系青磁の幅広蓮弁文碗が出現、坏Ⅲ類の大型品（盤）も
- ・白磁口禿碗が出現

II期（第4面下～第5面）13c中～後葉



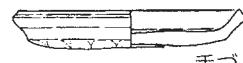
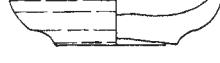
手づくね



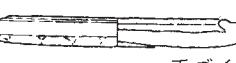
手づくね

- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系は減少
- ・白磁・青白磁は小物類が中心に
- ・常滑甕は5型式まで

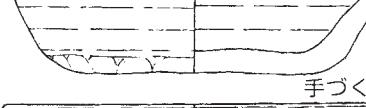
I～II期（第5面下～第6面）13c前～中葉



手づくね



手づくね



手づくね



手づくね



手づくね

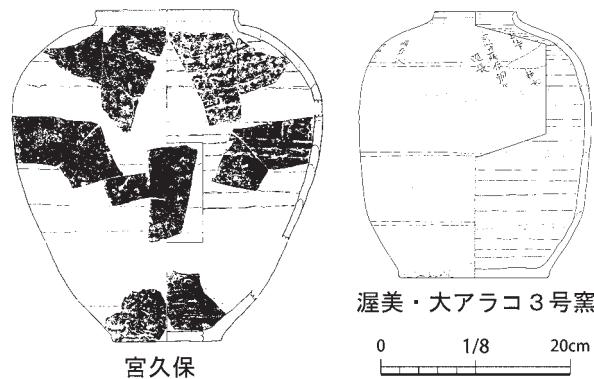
- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系も定量
- ・白磁・青白磁も散見
- ・碗・壺・小物類

0 1/3 10cm

【図2】鎌倉における「かわらけ」変遷の一例

(大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄58番4外地点)

土の作例を掲載しました。これらは、ヘラ文字の内容から藤原顯長が三河守に在任していた12世紀中頃の作品とされ、渋谷一族の居館跡とも推定される宮久保遺跡の建物群が、この頃に展開した可能性を示唆しています。鎌倉に幕府が成立する以前の、相模地域における流通や在地勢力の動向を考えるうえで貴重な資料といえるでしょう。



【図3】 湿美窯産「藤原」銘の短頸壺

細片であり、口縁部の屈曲具合も異なる満願寺遺跡の短頸壺ですが、創建期を含む満願寺の時代的特性を理解するに当たり、重要な情報を含んでいるのかもしれません。

おわりに

鎌倉の「かわらけ」は、儀礼や饗宴の場で大量消費されました。灯明皿としての使用例も多く、法会などでも用いられたことでしょう。

ここ満願寺遺跡での出土も何らかの法会との関係を想起させますが、今のところ出土量が少なく、断定には至りません。また、陶磁器も含め14世紀以降と思しき製品が主体となっている点、この時期の満願寺がどのような形で存続していたのかを考えるにあたって重要です。文献史学では満願寺の姿を追いかけにくくなる時期だけに、これら土器・陶磁器については、一層の精査・検討が求められます。



【図4】 中世鎌倉の概略地図（宗基秀明氏作成の原図を改変）